《開幕》シアスター・ゲイツ展：アフロ民藝

2024年4月24日（水）ー9月1日（日）　森美術館（六本木ヒルズ森タワー53階）

世界が注目するブラック・アーティスト、待望の日本初個展！
陶芸、建築、音楽で日本文化と黒人文化の新しいハイブリッドを描く、壮大なインスタレーション

森美術館は、2024年4月24日（水）から9月1日（日）まで、「シアスター・ゲイツ展：アフロ民藝」を開催します。

シアスター・ゲイツ（1973年シカゴ生まれ）は、米国シカゴのサウス・サイド地区を拠点とし、彫刻と陶芸作品を中心に、建築、音楽、パフォーマンス、ファッション、デザインなど、メディアやジャンルを横断する活動で国際的に高く評価されています。彫刻と都市計画の教育を受けたゲイツは2004年、愛知県常滑市で陶芸を学ぶために初来日し、以来20年以上にわたり、陶芸をはじめとする日本文化の影響を受けてきました。日本やアジア太平洋地域での印象深い出会いや発見、そして米国ミシシッピとシカゴにルーツを持つアフリカ系アメリカ人として生きてきた経験が、彼の創作の礎となっています。アーティストとして文化的ハイブリディティ（混合性）を探求してきたゲイツは、アメリカの公民権運動（1954-1968年）の一翼を担ったスローガン「ブラック・イズ・ビューティフル」と日本の「民藝運動」の哲学とを融合した、独自の美学を表す「アフロ民藝」[※]という言葉を生み出しました。ゲイツの日本初、そしてアジア最大規模の個展となる本展は「神聖な空間」「ブラック・ライブラリー＆ブラック・スペース」「ブラックネス」「年表」「アフロ民藝」の各セクションで構成され、これまでの代表作のみならず、本展のための新作を含む日本文化と関係の深い作品などを紹介します。

これまで多数派の声のみが取り上げられてきたことが問い直され、視点の多様化が求められる昨今、グローバルなアートシーンでは、第一線で活躍する黒人アーティストたちの表現に見られる多層的な経験が注目されています。黒人の歴史は、日本人の一般的な知識としては馴染みが薄いかもしれませんが、本展はゲイツの多角的な実践を通し、世界で注目を集め続けるブラック・アートの魅力に迫ります。同時に、手仕事への称賛、人種と政治への問い、文化の新たな融合などを謳う現代アートの意義を実感する機会となるでしょう。

※詳細はp.4-5を参照

《ドリス様式神殿》
2022年
高火度炻器、釉薬
サイズ可変
展示風景：「シアスター・ゲイツ展：ヤング・ローズと彼らの軌跡」
ニュー・ミュージアム（ニューヨーク）、2022-2023年
撮影：クリス・ストロング

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

シアスター・ゲイツ　メッセージ

私にとって日本の民藝運動は、民衆が生み出すものに美を見出し、礼賛するというメカニズムを理解するうえで、20年以上にわたり大事な道しるべとなってきました。米国におけるブラック･パワー運動、黒人解放運動と同様、民藝運動は、西洋文明が瞬く間に侵食してくるなか、極めて特有な伝統や歴史を大切に守り継ごうとしました。もちろん両者ともに盲点や偏り、さらには否定的な意見を抱えていたわけですが、共通していたのは、地域性を称え、美への意識を高め、文化の力を尊ぶ、揺るぎない態度でした。「アフロ民藝」とは、私の芸術の旅路においてこの２つの最も重要な運動を融合させる試みなのです。

略歴

1973年、米国イリノイ州シカゴ生まれ、同地在住。アイオワ州立大学と南アフリカのケープタウン大学で都市デザイン、陶芸、宗教学、視覚芸術を学ぶ。土という素材、客体性（鑑賞者との関係性）、空間と物質性などの視覚芸術理論を用いて、ブラックネス（黒人であること）の複雑さを巧みに表現している。2004年、愛知県常滑市「とこなめ国際やきものホームステイ」（IWCAT）への参加を機に、現在まで20年にわたり常滑市の陶磁器の文化的価値と伝統に敬意と強い関心を持ち、陶芸家や地域の人々と関係を築いてきた。近年の主な個展に、ニュー･ミュージアム（ニューヨーク、2022-2023年）、サーペンタイン･パビリオン（ロンドン、2022年）、ホワイトチャペル･ギャラリー（ロンドン、2021年）、ウォーカー･アート･センター（ミネアポリス、2019-2020年）、マルティン･グロピウス･バウ（ベルリン、2019年）、パレ･ド･トーキョー（パリ、2019年）、プラダ財団（ミラノ、2018年）などがある。日本では、国際芸術祭「あいち2022」に出展、2019年には公益財団法人大林財団「都市のヴィジョン」の助成対象者として選出され、国内でリサーチプロジェクトを実施した。

開催概要

展覧会名：「シアスター･ゲイツ展：アフロ民藝」
主催：森美術館
協賛：株式会社大林組、ブルームバーグ･フィランソロピーズ、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社、ウッドフォードリザーブ
特別協力：WHITE CUBE　**協力**：ガゴシアン、GRAY　**制作協力**：山翠舎、香老舗 松栄堂、宇治茶 堀井七茗園、HOSOO
企画：徳山拓一（森美術館アソシエイト･キュレーター）、片岡真実（森美術館館長）
会期：2024年4月24日（水）－ 2024年9月1日（日）
会場：森美術館（東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー53階）
開館時間：10:00-22:00（火曜日のみ17:00まで、ただし4月30日［火］、8月13日［火］は22:00まで）
＊入館は閉館時間の30分前まで　＊会期中無休

入館料：

	［平日］		［土・日・休日］	
	当日窓口	オンライン	当日窓口	オンライン
一般	2,000円	1,800円	2,200円	2,000円
学生（高校・大学生）	1,400円	1,300円	1,500円	1,400円
子供（中学生以下）	無 料			
シニア（65歳以上）	1,700円	1,500円	1,900円	1,700円

＊ 事前予約制（日時指定券）を導入しています。専用オンラインサイトから「日時指定券」の購入が可能です。
＊ 当日、日時指定枠に空きがある場合は、事前予約なしでご入館いただけます。
＊ 表示料金は消費税込
＊ 本展のチケットで、同時開催プログラムもご鑑賞いただけます。

同時開催：「MAMコレクション018：グエン･チン･ティ」
「MAMスクリーン019：1980～1990年代、台湾ビデオ･アートの黎明期（上映編）」
「MAMリサーチ010：1980～1990年代、台湾ビデオ･アートの黎明期（展覧会編）」

一般のお問い合わせ：Tel: 050-5541-8600（ハローダイヤル）　森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

本展の特徴とみどころ

黒人アーティストによる国内最大規模の個展

グローバルなアートシーンで近年関心が集まるブラック・アート。なかでも高い注目度を誇るシアスター・ゲイツの過去の代表作から新作までを一堂に体験できる貴重な機会です。背景にある黒人史や黒人文化と併せて包括的に紹介する本展は、国内では過去に例を見ないスケールでの試みとなります。常滑市で制作された陶芸と彫刻が融合した大型インスタレーション、歴史的資料のアーカイブ、タールを素材とした絵画、音響作品、映像作品など、充実した作品群が展示されます。

展示風景：「シアスター・ゲイツ展：土の説教」ホワイトチャペル・ギャラリー（ロンドン）、2021-2022年
撮影：テオ・クリステリス
画像提供：ホワイトチャペル・ギャラリー（ロンドン）

「ブラック・イズ・ビューティフル」運動からゲイツが思い描く未来まで、黒人史がもたらした現代文化への影響を紹介

近年のブラック・ライブズ・マター（BLM）運動を含む、黒人差別や迫害に抗ってきた歴史において、大きな役割を担ってきた黒人の工芸、アート、音楽、ファッションなどは、これまでになく高い注目を集めています。そこには、何世紀にもわたる人種的暴力と植民地主義に対し、アクティブかつクリエイティブに抗ってきた一つの文化が反映されています。本展は、ゲイツの領域を横断する多彩な作品群を通して、黒人文化の今日的な重要性や意義を示します。

シカゴを中心とした建築プロジェクトなど、「空間実践」の代表的プロジェクトを紹介

世界的に知られているゲイツの建築プロジェクトの中から、2009年に設立した財団「リビルド・ファウンデーション」の活動を資料で紹介します。恣意的に隔離され、土地の所有や投資などの平等な権利を与えられなかった黒人が多数を占めるシカゴのサウス・サイド。ゲイツは、この地区の廃墟となった40軒以上の建物を、誰もがアートや文化活動に参加できる空間に作り変えてきました。

リビルド・ファウンデーションの活動には、黒人の歴史と文化を記録する重要なコレクションの管理、保存、展示も含まれます。たとえば、黒人の生活や暮らしについての雑誌『エボニー』『ジェット』を発行し、20世紀後半に全米の黒人社会で多大な影響力を持ったシカゴ拠点の出版社ジョンソン・パブリッシング・カンパニー（JPC）のアーカイブや、「ハウスのゴッドファーザー」として知られるDJ、故フランキー・ナックルズ（1955-2014年）が所有していたレコード・コレクションなど、文化的・歴史的に貴重な品々を地域住民に公開し、活動への参加を呼びかけています。

《ストーニー・アイランド・アーツ・バンク》（外観）［上］、（内観）［下］
2015年-
撮影：トム・ハリス　画像提供：White Cube

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

日本と関わりの深い新作・プロジェクト

常滑で制作された黒い陶器や、江戸後期の歌人であり陶芸家でもある大田垣蓮月に影響を受けた作品など、黒人文化と日本文化を組み合わせた作品を展示します。さらに、長野で古材の利活用をしている山翠舎、京都の香老舗である松栄堂、宇治茶堀井七茗園、西陣織のHOSOOなど、ゲイツが日本各地の作り手たちとコラボレーションした様々なプロジェクトが展開されます。

展示室内にブックラウンジ「ブラック・ライブラリー」が登場

展示室の壁を本棚で埋め尽くす「ブラック・ライブラリー」が登場。ブラック・アート、歴史、文化に関する数千冊もの書籍を自由に閲覧することができます。

音楽のパフォーマンスやワークショップなどイベントを多数開催予定

展覧会期中には、会場内での音楽パフォーマンスやDJイベント、常滑市にある旧土管工場（丸利陶管）でのインスタレーションなど、ゲイツの幅広い活動を紹介するさまざまなイベントが予定されています。

《ザ・リスニング・ハウス》 2022年
展示風景：国際芸術祭「あいち2022」 撮影：ToLoLo studio ※参考図版

《ヘブンリー・コード》 2022年
レスリースピーカー、ハモンドオルガンB-3、サウンド サイズ可変
撮影：ジム・プリンツ・フォトグラフィー

「アフロ民藝」とは？

「アフロ民藝」は、シアスター・ゲイツがハイブリッドな文化の未来構想として描く、黒人の美学と日本の工芸の哲学を融合させた新たな美学のマニフェストです。ゲイツが長年にわたり築いてきた日本、中国、韓国の陶磁器の歴史との関係をたどりながら、日本の民藝運動と米国の「ブラック・イズ・ビューティフル」運動という２つの重要な運動を反映する、芸術的で知的な試みです。両運動は、ともに文化的な独自性が、近代化と欧米化という外的かつ支配的な圧力によって脅かされていた時代に、大衆への訴求、学術的な討論やプロパガンダを手段として活発になりました。

ゲイツは「アフロ民藝」について「フィクションであると同時に真理でもある」と言います。これまでの活動の集大成として、ゲイツのアートに大きな影響を与えた民藝運動を生んだ日本で本展を開催することは、文化がその国で、世界で、そして文化間で醸成されていく過程へのオマージュであり、証でもあります。

《店頭用サイン》 2018年
ネオン 114.9×114.9 cm
Courtesy: White Cube 撮影：テオ・クリステリス

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川） E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

「アフロ民藝」を紐解くキーワード

1.「アフロ」とは？

接頭語の「アフロ」は、公民権運動の際に黒人としてのアイデンティティとエンパワーメントの象徴として広まったヘアスタイルを指し、広くは「アフリカ系」を意味します。

2. 名もなき職人たちと見過ごされてきた素材

「民藝」は宗教哲学者であり美術評論家の柳宗悦（1889-1961年）が、陶芸家の濱田庄司や河井寛次郎とともにつくった造語で、無名の工人たちの手仕事による工芸品のことを指します。柳は、芸術、哲学、宗教が織り交ざる伝統文化から生まれた民藝を、「従来の芸術や美の概念にはない特有の美しさを秘めるもの」と評しました。民藝は、個人の芸術家ではなく工人が無心で制作した工芸品や、人々が生活の中で使う生活雑器の中に真の美しさを見出します。

3.「アフロ」と「民藝」のハイブリッド

本展出品作の多くは、アメリカで今なお根強いアフリカ系アメリカ人への差別意識に抵抗し、生き抜こうとする彼らの集団意識から生まれた「ブラックネス（黒人であること）」に言及しています。アメリカ人であると同時に黒人であるゲイツ自身の「二重意識」(※)を生かし、「アフロ民藝」では、黒人文化と日本文化という二つの異なる文化的次元を実験的に融合させています。

たとえば、ペンテコステ派やバプティスト派の教会で用いられる「ハモンドオルガンB-3」は、人種間の緊迫関係のなかで黒人コミュニティが求めた精神的・政治的な安らぎの場の寓意とされています。このようなアフリカ系アメリカ人の深層的な集団意識を象徴するものや、アフリカの工芸品と、日本の陶磁器や茶器、香具や酒器などの儀式で使われる道具とを大胆に組み合わせることにより、世代を超えて継承される工芸を称賛しつつ、新たな文化的価値を生み出そうとしています。

※アメリカ黒人解放運動の指導者であった社会学者のW・E・B・デュボイス（1868-1963年）が著書『黒人のたましい』（1903年）で指摘した、アフリカ系アメリカ人が直面する意識の二重性。

4. ゲイツの陶芸作品に見られるいくつもの原点

ゲイツはこれまでさまざまな観点から陶芸作品を発表してきました。初期の重要な作品のひとつには、日本から米国ミシシッピ州に渡った架空の陶芸家「山口庄司」を題材にしたものがあります。黒人女性と結婚し、日本の陶芸とアフリカ系アメリカ人の表現を融合した山口の作品は、全てゲイツ自身の創作でした。その他の陶芸作品にも、アフリカの工芸や、奴隷の陶芸職人であったデイヴィッド・ドレイク（1801-1874年頃）、アメリカの陶芸作家ピーター・ヴォーコス（1924-2002年）、そして日本の多様な陶芸史などの影響が見受けられます。ハイブリッドな背景から成り立つゲイツの陶芸作品は、「アフロ民藝」を解釈するうえで非常に重要なメディアとなっています。

5. 人々の協働とコミュニティ

ゲイツがシカゴ市のサウス・サイド地区で手掛けた地域再生プロジェクトでは、忘れ去られた空間に命を吹き込むべく、建物を再生し、人々が集い、交流し、協働できる新たな拠点を創出しています。柳宗悦は、民藝には「真に協力の世界が見える」と述べ、その多くは地域社会の人々の協力なくして成立しないとし、また「乱れた社会の組織からは、正しい工藝を予期することができぬ。」(※)とも書いています。創造活動を通した社会貢献ともいえるゲイツのプロジェクトは、そうした柳の思想と呼応します。

※柳 宗悦『工藝の道』（講談社学術文庫、2005年）54-55頁

最新のプレス画像は、こちらのURLより申請、ダウンロードいただけます。
https://tayori.com/f/theastergates/

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

展覧会関連プログラム

アーティストトーク ※日英同時通訳・手話同時通訳付

アーティスト本人が作品背景や本展覧会について語ります。

出演：シアスター・ゲイツ（アーティスト）
聞き手：徳山拓一（本展キュレーター／森美術館アソシエイト・キュレーター）、片岡真実（本展キュレーター／森美術館館長）
日時：2024年4月25日（木）18:30-20:00
会場：森美術館オーディトリアム（六本木ヒルズ森タワー53階）
定員：80名（要予約）
料金：無料（ただし、当日有効の本展覧会チケットが必要です）
お申し込み：受付は終了しました

シンポジウム「いま、なぜ民藝なのか?」 ※日英同時通訳、手話同時通訳付

柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎らが中心となって概念をつくり、1926年から日本で始まった民藝運動。2021年に柳宗悦没後60年を記念した「民藝の100年」展が東京国立近代美術館で開催されたほか、2023年には大阪中之島美術館を皮切りに「民藝MINGEI—美は暮らしのなかにある」展が巡回するなど、近年、民藝への関心は高まりを見せています。一方、シアスター・ゲイツは民藝を文化的価値再考の象徴として捉え、黒人文化との融合を「アフロ民藝」というコンセプトを通して試みています。
第1部では、工芸、デザイン、現代アートといった観点から、民藝が今日の私たちの日常生活や社会にどのような意義をもたらしているのかを考えます。第2部では、アフリカ工芸など、これまで民藝として捉えられてこなかった表現を検証し、現代における民藝の解釈の可能性について議論します。

日時：2024年5月11日（土）17:00-20:00
会場：アカデミーヒルズ（六本木ヒルズ森タワー49階）
定員：150名（要予約）
料金：500円（展覧会チケットは含まれません）
お申し込み：森美術館ウェブサイト　www.mori.art.museum

第1部　**出演**：花井久穂（東京国立近代美術館主任研究員）
深澤直人（公益財団法人日本民藝館館長）
片岡真実（森美術館館長）

第2部　**出演**：小川 弘（株式会社東京かんかん代表）
鷺 珠江（河井寛次郎記念館学芸員）
中村裕太（アーティスト）
徳山拓一（森美術館アソシエイト・キュレーター）

＊プログラムは予告なく変更になる場合があります。あらかじめご了承ください。
＊このほかにも、おやこでアート、スクールプログラム、アクセスプログラムなどさまざまな企画を予定しています。
プログラムの詳細やお申し込みなどの最新情報は、森美術館ウェブサイトにてご確認ください。www.mori.art.museum

プログラムに関するお問い合わせ：森美術館 ラーニング担当
E-mail: mam-learning@mori.co.jp

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

関連情報

▌音声ガイド

シアスター・ゲイツ本人による作品解説、本展担当キュレーターの片岡真実と徳山拓一による展覧会解説が収録された音声ガイドをウェブアプリにてご用意しています。
どなたでも無料でご利用いただけますので、ぜひお楽しみください。
＊ご自身のスマートフォンをご持参ください。

ガイド件数：全20件　**解説時間**：約35分　**言語**：日本語、英語　**料金**：無料
企画・制作：スタイリンクス
監修：森美術館

▌展覧会カタログ

シアスター・ゲイツ自身によるテキストをはじめ、片岡真実（森美術館館長）による作家インタビュー、徳山拓一（森美術館アソシエイト・キュレーター）、チェルシー・フォックスウェル（シカゴ大学美術史学科教授）、ココ・フスコ（アーティスト、文筆家）による論考などを掲載。

サイズ：A4判（29.7×21cm）　**ページ数**：264ページ（予定）　**言語**：日英バイリンガル
価格：3,784円（税込）　**発売日**：未定　**編著**：森美術館　**発行**：torch press
販売場所：森美術館 ショップ 53（六本木ヒルズ森タワー53階）、森美術館 ショップ（六本木ヒルズウェストウォーク3階）、森美術館オンラインショップ（https://shop.mori.art.museum/）

お問い合わせ：森美術館 ショップ 53
Tel：03-6406-6118　営業時間：10:00-22:00（祝日を除く火曜日は17:00まで）　＊美術館の開館時間に準ずる

▌展覧会場でのパフォーマンス

本展で展示する《ヘブンリー・コード》（2022年）は、1台のハモンドオルガンと7台のレスリースピーカーから構成されるインスタレーション作品です。ハモンドオルガンB-3は1930年代にシカゴで発明され、黒人居住地区の教会では、高価なパイプオルガンに代わりレスリースピーカーとともに広く使われてきた楽器です。
本展会期中の毎週日曜日には、オルガン奏者が本作品のオルガンを演奏するパフォーマンスを行います。ぜひこの機会に、黒人音楽の本場の音色をご体験ください。

場所：森美術館「シアスター・ゲイツ展：アフロ民藝」展示室内（ギャラリー1）
日時：5月以降の毎週日曜日、14:00 -17:00（途中、演奏者の休憩含む）
＊日時は予告なく変更になる場合があります。最新情報は森美術館ウェブサイトにてご確認ください。 www.mori.art.museum
＊場合により17:00以前に終了する可能性があります。
料金：無料
お申し込み：不要
＊当日有効の本展チケットを購入のうえ、直接展示室へお越しください。
演奏者：土田晴信、西川直人
＊4月24-28日はシアスター・ゲイツ率いるバンド、ザ・ブラック・モンクスのメンバー2名による演奏を予定しています。

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

▌“世田美と森美でW民藝展” Instagramキャンペーン

「シアスター・ゲイツ展：アフロ民藝」と同日の4月24日（水）に世田谷美術館で開幕する「民藝 MINGEI―美は暮らしのなかにある」。「民藝」を冠した両展覧会の開催を記念して、“世田美と森美でW民藝展” Instagramキャンペーンを実施いたします。二つの展覧会を巡り、それぞれの好きな作品、見どころなどの感想をInstagramでハッシュタグ「#世田美と森美でW民藝展」をつけてご投稿ください。
投稿いただいた方から抽選で5名様に両展覧会のグッズを差し上げます。

キャンペーン期間：2024年4月24日（水）～6月30日（日）
＊当選者にはキャンペーン終了後、「民藝 MINGEI」展公式アカウントまたは森美術館公式アカウントよりDMにてご連絡させていただきます。

世田谷美術館「民藝 MINGEI―美は暮らしのなかにある」
会期：2024年4月24日（水）～6月30日（日）

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

森美術館「シアスター・ゲイツ展：アフロ民藝」同時開催小プログラムのご案内

会期：2024年4月24日（水）– 2024年9月1日（日）　**会場**：森美術館（六本木ヒルズ森タワー53階）

MAM COLLECTION

MAMコレクションは、森美術館の収蔵品を、多様なテーマに沿って順次紹介する展覧会シリーズです。

MAMコレクション018：グエン・チン・ティ

主催：森美術館

https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/mamcollection018/

＊《47日間、音のない》はハン・ネフケンス財団、森美術館、M＋（香港）、シンガポール美術館による共同コミッション作品です。

グエン・チン・ティ
《47日間、音のない》
2024年
3チャンネル・ビデオ、白黒とカラー、サウンド、ミラー
30分
展示風景：「山水：共鳴と呼応」M＋（香港）2024年
撮影：ダン・レオン
画像提供：M＋（香港）

MAM SCREEN

MAMスクリーンは、世界の多様な映像作品のなかから選りすぐりのシングル・チャンネル作品を上映するプログラムです。

MAMスクリーン019：1980～1990年代、台湾ビデオ・アートの黎明期（上映編）

主催：森美術館
助成：台湾文化部
後援：台北駐日経済文化代表処台湾文化センター
企画：スン・ソンロン（孫松榮、国立台北芸術大学教授）
近藤健一（森美術館シニア・キュレーター）

https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/mamscreen019/

リン・ジュンジー（林俊吉）
《グラスII》
1997年　ビデオ、カラー、サウンド
9分14秒
写真撮影：サンドラ・リースマン

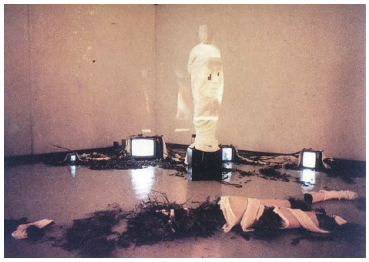
MAM RESEARCH

MAMリサーチは、アジアの現代美術を中心に特定の作家や動向に着目し、歴史的、社会的な文脈とともに考える資料展示です。

MAMリサーチ010：1980～1990年代、台湾ビデオ・アートの黎明期（展覧会編）

主催：森美術館
助成：台湾文化部
後援：台北駐日経済文化代表処台湾文化センター
企画：スン・ソンロン（孫松榮、国立台北芸術大学教授）
近藤健一（森美術館シニア・キュレーター）

https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/mamresearch010/



カク・イフン（グオ・イーフェン／郭挹芬）、
ロ・メトク（ルー・ミンドー／盧明德）
《サイレント・ボディー》
1987年
パフォーマンス、5チャンネル・ビデオ（白黒、サイレント）、
ブラウン管モニター、枝、白い布
サイズ可変
展示風景：「実験芸術：アクション・スペース」台北市立美術館、1987年

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp